

人は死ぬために生まれてくるのだ。

そんな、ちぐはぐな言葉を聞いたことがある。

「あら、随分と哲学的なことを言うのね、智大くんは」

須賀が、緩やかな弧を描いて膨らんでいる自身の腹を撫でながら、ゆったりした声で言った。

「私、そんなことを考えたこともないわ」

「オレだつてないよ。でも今日、クラスのやつが言つてたんだ」
細道への階段は長くて急だ。苦しくなつてきて、詰襟の首元をいじる。つい数週間前までは、Yシャツだけでよかったのに。

「そんなことより、須賀さん。大丈夫？ 腹、苦しくない？」

「大丈夫よ、ありがとう。智大くんこそ大変そうだけど」

智大は苦笑を浮かべ、額の汗をぬぐった。

「母さんがごちやごちやうるさくて、着替えてくるのを忘れてきちゃつて」

「着替えてきてもいいのよ。かさはつて苦しそうだわ」

「いいよ、オレのことは気にしないで」

ようやく階段を上り終えて振り向くと、町の向こうの夕日が目に染みた。思わず目を細める。

智大たちの住んでいる田舎町は、はずれに神社へ続く細道があつて、小さな頃は智大もよく探検やお参りに行つた。『近所のお姉さん』である須賀と行くのも、今回で三度目になる。

と言うのも、須賀の腹には今、小さな命が宿っているのだ。安産祈願をしたいということで、智大は、身重な須賀のフロロ―を頼まれたのだった。

三十分前のこと。

「最近失踪事件が多いのよ」

智大が帰つて来るなり、母はこう言つた。

「怪しい人を見たら、追いかけようとしなくて、音々ちゃん（須賀の名）に頼るのよ。誘拐事件だとも言われているくらいなんだからね」

何を言ってるんだ、と思う。中学二年生の息子を引つ摺まえて、妊婦に頼れ？ 馬鹿にしないでほしい。

言い返すのもあほらしくなり、無言で家を出た。着替えることなど、頭から飛んでいた。

そんなことがあつて、智大はかなり勇気のある……いや、勇気がありすぎて無謀な若者となつていた。だからこそ先ほど、普段の平凡な中学生である彼なら、なかなかやらないようなことをしたのである。

家を出て数分のところにある公園、そこで須賀と待ち合わせをし、神社へ向かうことになっていた。足早に公園へと入った智大は、すでに公園のベンチに座っていた須賀のところまで駆けた。

「ねえ、智大くん。どうしたのかしら、あの人」

挨拶もそこそこに、いきなりブランコの横にある巨木を指さす須賀。

そこには、男が仰向けに寝転んでいた。完全に脱力し、四肢を伸ばしきっている。白いTシャツには、今にも腕からとれてしまいそうなジーンズジャンパーと、薄汚れたショルダーバッグが引つかかっていた。迷彩色の七分丈パンツからは、にゅつと長い脚が伸び、黒いスポーツシューズには泥がついている。

「何だよ、あいつ」

智大は最初、男が不良なのではないかと思った。彼は遠くからでもわかるような、見事な蜂蜜色の髪をしていたのだ。

しかしカフェオレ色の肌は、日焼けで得るものよりもずっと自然かつ濃いもので、男が日本人ではないことを主張している。

智大は須賀の制止を振り切り、男に歩み寄った。

「おい、お前！」

大声で呼んでみる。男は目をつむったままだ。

「おいってばー！」

爪先で軽く、男の脚をつついてみる。それでも彼の目が何色

かはわからない。

流石に心配になってきた。

「どうしたんだよ、おい！」

言葉を言い終わらないうちに、男が目を開けた。

智大も、驚きのあまり目を見開いてしまった。

そこにあったのは、澄んだエメラルドグリーン。

一對の翠玉が、こちらを見上げる。

「イブティカル・ハーシウ・ムフタ」

突如、男の口から、穏やかなテノールが流れ出た。不思議な響きを伴うそれは、まるで呪文のようだった。

「……は？」

「名前」

間髪入れずに短く答え、男はむくりと起き上がる。

「ブティカでいい」

「ぶ、ぶていか？」

いつの間にか智大の近くまで来ていた須賀が、眉をひそめて聞き返した。

イブティカル——ブティカは立ち上がり、尻についた土をはらおうとせずに、突如須賀の前まで歩み寄った。

「そっ」

よどみのない双眼に射すくめられ、須賀が後ずさる。智大は彼女をかばうように、二人の間に割り込んだ。

「こつ、こんなところに、何しに来たんだよ！」

ブテイカはすぐには答えなかった。須賀をしばらく見つめていたかと思うと、不意に、智大の方を向いた。

全く予測できない動き。何の感情も読み取れない目。智大もつい逃げ腰になったが、後ろには須賀がいる。

もうオレだって、ガキじゃないんだからな。

ぐつと唇を噛み、ブテイカの視線を受け止めた。何かを言うかと、彼の唇が動く……。

「ガキ」

視線は受け止めたが、言葉は受け止めきれなかった。

「なっ」

思わず叫ぶ。声が重なったのがわかった。須賀も声を漏らすにはいらなかったようだ。

「う、うるせえ、お前に言われたかねえよ！ はやく神社に行こう、須賀さん」

真つ赤な顔をして怒鳴り返すと、須賀の手を握り、踵を返す。

ブテイカは追ってはこなかった。公園を出る直前に振り向いたが、彼はその場から一步も動いてはおらず、黙ってこちらを見

ているだけだった。

そうして今、須賀と制服姿の智大は、神社への道のりを辿りながら、須賀いわく哲学的な話をしているわけなのだ。

「さっきの智大くん、かつこよかったよ。頼りになるなあ」

細道に差し掛かる朱塗りの鳥居が見えてきた頃、須賀がにっこり笑って言った。

「だってあいつ、よくわかんないし。志原さんがいないから、須賀さんを守ってやれるの、今、オレだけだし……」

もによもによと智大が発した語尾は、秋涼にとけていく。

志原^{しはら}。それは須賀の腹の中にいる子供の、父親の名前だ。一度智大もその姿を見たことがあるが、少しボリュームのある体型をした眼鏡男である。

須賀の話によると、彼は優秀なサラリーマンらしく、海外出張が多い。最近姿を見せないのは、スイスに行っているからだそうだ。

「ふふ」

須賀は幸せそうに笑っただけで、それに応じた。

小さな頃から、よく遊んでくれた須賀。智大の初恋の人も彼女だったくらいだ。

数ヶ月前は顔色も悪く、ぶくぶくと太ってしまっていたのだが、つわりがきつかったのか、今では元の体型に戻っている。

何よりも、幸せそうな顔に戻っていてよかった。

鳥居をくぐり、深い森の中に入ると、体感温度が一気に下がった。木々が太陽光を遮り、辺りは不気味なほどひんやりとしている。

しかし、智大の体温を下げた原因は、それだけではなかった。いつの間に抜かしたのだろう。すぐ前方に、黒いスポーツシューズを履いた、カフェオレの色の脚が見えた。間違いない。あいつだ。今度は、細道のど真ん中で寝ている。

「おつまえ、何なんだよホント！」

僅かにでも驚いてしまったことに腹が立つ。今度は思いきり蹴っ飛ばしてやろうと、太股で歩いて行っただ。残念ながらブレイカがすぐに起き上がったので、完全にタイミングを逃してしまったのだが。

薄暗い中でも、翠玉の眸はよく目立つ。ブレイカは二回瞬きをしてから言った。

「俺が行く」

「は、ありえねえし。日本語間違ってるしな。『俺が行く』じゃなくて、『俺も行きたい』だろ」

智大の即答に気を悪くしたのか、眉間にしわを寄せる金髪の青年。

「人を食ってる」

「はあ？」

「ふふっ」

おびえて背後にいたはずの須賀が、いきなり吹き出したので、智大は驚いて振り返った。

「この人、智大くんが生意気だつて言ってるのよ。人を食った話し方をする、つて言うじゃない？ 面白い人だわ」

何が面白いのか全然わからない。というか面白くない。

「ね、つれていってあげましょうよ。この人も、お参りがしたいのよ。私は須賀。須賀音々というの。ほら、智大くんも」

「……国枝智大」

ただ智大は、初恋の人に頭が上がらない男なのだった。

初めて須賀に会ったのは、小学一年生の頃だった。友達と喧嘩別れして泣きながら帰る智大に、買い物帰りだった須賀は、袋の中からアイスクャンディをくれたのだ。

——泣くことは、優しくなるための一歩なのよ。

美しく笑う人。優しく撫でてくれた人。

——自分が泣いたぶん、相手を泣かせないようにしてあげなさい。相手のことを、思いやってあげなさい。

絹よりも滑らかな糸で紡がれた言葉は、智大の身体に浸透し、枯れた心を潤した。

それから智大は、何度も彼女の家に通った。家族ぐるみで須

賀と交流し、志原の話を聞くことになるまでは。

智大、須賀、ブティカの順番に、細道を上っていく。最初はちらちらとブティカを気にしていた智大だが、須賀がここにこしたままなので、五分も経つとどうでもよくなったようだ。黙々と足を前に出し続けている。

「そういえば、ブティカさん。さっき智大くんが言っていたのですが、人は死ぬために生まれてくるのだと思いますか？」

ふと、須賀のゆつたりとした声が、沈黙を破った。

「生き物は死ねば土に還る。そして肥やしとなる」

男はすらすらと、朗読でもするように答える。

「あら、じゃあ、賛成なんですか？」

「生きる意味なんて知らない。死ねば次の命への架け橋となる。俺が言えるのはそれだけ」

やつぱり変な奴だ。智大は思った。

何のためにここに来たのかも、未だにわからない。せめてこれだけは聞いておこうと、振り返ろうとした智大は、肩をびくつかせた。

須賀の笑い方が異常だった。にこにこ、じゃない。にたにた。口が裂けそうなほど口角を上げ、笑っている……。

と、思ったら、見間違いだったようだ。須賀の浮かべている笑顔は、やはり幼い頃から見てきた、柔らかなものだった。気をとりなおし、ブティカに問う。

「お前、何しにここに来たんだよ」

「仕事」

「お仕事？　いくつでいらっしゃるの？」

今度は須賀の質問。

「二十一」

結構年上だった。これだと智大より、須賀の歳に近い。

少しショックを受けつつ、追求する。

「つかさ、仕事って何？」

「メモリート」

「何それ」

突然、ブティカが立ち止まった。

後ろを向く。もうあの鳥居が随分小さくなっていた。シヨルダーバッグに手を入れ、紫色のお守りがくりつけてある質素な堅琴を出す。慣れた手つきで弾いた。

ぽううん……木々の間に、浸透していく音色。耳が痺れる。

こいつ、詩人だったのか？　なんて、呑気なことを思っている場合ではなかった。

「きやあ！」

須賀が悲鳴をあげた。彼女の脚に木の根が、蛇のようにからみついている。須賀が暴れても離れる気配はない。

智大も根を引き剥がそうとすると、ブティカが低い声で一言。「やめろ」

信じられない思いで彼の顔を見る。

「今のは……今のはお前がやったのか？」

答える代わりに、ブティカはもう一度堅琴の弦を弾いた。今度はつるが伸びてきて、腹の膨らんだ彼女の体を締め付ける。

智大はブティカに殴りかかった。

「何してんだ、離せよ！」

「ガキだ」

拳を受け止め、またそう口にするブティカ。全く動揺のない緑の目が憎たらしい。

「ふざけんなてめえつ、オレのこと散々……」

「違っ」

ブティカの苛立った声に、びっくりと体がはねた。

今まで彼の声は、全く変わらなかったのに。

須賀が助けてと叫んでいる。この男を何とかしなければと思うのだが、ブティカに掴まれた手が動かない。

「俺は子供のことをガキというほど口は悪くない」

「じゃあ、どういう意味で……」

「餓えた鬼と書いて『餓鬼』。彼女の体に乗っ取り、人を誘拐し

てきては食らっている、魔物のことだ」

全てが、止まった。

智大はブティカに怒鳴るのをやめ、須賀は暴れるのをやめ、ブティカは苛立った顔をするのをやめた。

彼はこう言った。

『ガキ』『俺が行く』『人を食ってる』『ガキ』は『餓鬼』

智大を馬鹿にしていたわけではない。一つは智大に対する警告。餓鬼を退治しに来た。俺が行くから、お前は逃げろ。あいつは人を食っている。

もう一つは、須賀に対する挑発。智大が怒って、もしくは意味を察して、須賀からパニックにならずに離れることを狙っていた。大騒ぎになることは避けたかったのだろう、焦った須賀は何をしでかすかわからない。

智大の行動は狙い通りにはならなかったようだが、現に須賀は、ブティカを仲間に招き入れた。事実を知っている彼の息の根を止めるために。

まさか。

一連の出来事は全て、ブティカの想定した範囲内の出来事なのか。

瞬時に、全身の肌が粟立った。

確かに彼の話し方は、無駄なものを一切省いた、簡潔的を射たもの。要点だけを取り出したものだ。

それを、彼が意識せずにやっているとしたら？

智大たちと出会ったその瞬間から、ここまで計算していたとしたら？

それは間違いなく、「天才」の為し得ることだった。

化け物は……須賀だけじゃない。

「スガ」

ブティカの声で我に返った智大は、言葉を失う。須賀が、にたにたと笑っていた。黄色の腐りかけたような目をむき出しにし、口からは異様にぼろぼろの牙をのぞかせていた。

「あなたが子を疎むほど、愛した人の名は？」

確認するかのように、ブティカが問う。

疎む云々は置いておくとして、愛した人の名。智大だつて言えるものだ。いつも須賀が言っていた。志原。志原貴史。たかふみ

「……」

須賀はにたにた笑ったまま、答えない。あんなに嬉しそうに口にしていた名。一緒に苗子になるのを楽しみにしていた名を。

「な、何で、だよ！ 須賀さんっ」

細道へ行く途中にしていた話。「志原」と智大は確かに言った。

それに対し、須賀は笑っただけだった。

笑っただけだったのではない。笑うしかなかったのだ。

智大が誰の話をしているのか、今の彼女にはわからなかったのだから。

ひよい。振り向いたブティカがいきなり、智大の腰を掴んで持ち上げた。

「うわっ！」

布団を干すかのように、自らの左肩に智大をひっかける。腹がブティカの肩に強く食い込み、智大はうめいた。

「今回はソラくんがいない。これで我慢して」

謎の言葉を発するブティカ。智大は言い返そうとしたが、その前に彼の体が揺れたので、慌ててジーンズジャンパーに捕まった。ブティカが右足の爪先で、軽く地面を叩いたのだった。びしびしびし。何かにヒビが入っていくような音が聞こえる。

次の瞬間、甲高い断末魔が、鼓膜を震わせた。

あなたはいつだって、オレの話を聞いてくれた。

優しく笑って、色んなことを教えてくれた。

オレが、あなたを愛していたのに。

あなたはオレを選べば、幸せになれたのに。

ブテイカの背中しか見えていなかった智大だが、地面に戻されたときに、何が起こったのかは大体見当がついた。「嘘だ」と小さくつぶやいたのは、信じられなかったからではない。信じられなかっただけだ。

ちょうど須賀のいたところで、地面がぱつくりと、口を開けている。落とし穴のような可愛い穴ではなく、地獄へと続いているような、深い裂け目。地底の住人が、無理矢理腕を出して、こじ開けたような地割れだった。

「危ない、トモヒロ」

ブテイカの手を振り払う気力もない。彼に腕を掴まれて初めて、自分が地割れへと歩き出しているのに気が付いた。

ブテイカが再び右足で地面を叩くと、ずらず、と地面が動いて、割れ目がゆつくりとふさがって行っった。

腕を離されると、智大はさっきまで地割れがあったところに膝をついた。

「……音々お姉ちゃん」

須賀に対する想いと一緒に、奈落の底へ落ちて行っったのかも知らない。何も出てこない。涙も、言葉も、感情すらも。

ようやく浮かんできたのは、自分でもよくわからない、安堵に似たものだった。

オレの中の彼女との思い出が、これ以上汚されることはない。

彼女が、志原のことを考えることも、ない。

音々お姉ちゃんと最期まで一緒にいたのは、オレだ。

「大丈夫」

ブテイカが静かにつぶやいた。

「どんな罪人であろうとも、その肉体が肥やしとなって、新たな命を生み出せるから」

そして、よんだ瞳の少年を見下ろす。

彼にもう、その言葉は届いていなかった。

とつくに、届かない位置に行ってしまった。

智大はその後のことを、あまりよく覚えていない。放心状態になり、足腰も立たなくなつて、ブテイカに背負われたまま、細道を下って行っったところまでは覚えてる。そこからいきなり、母の涙混じりの怒声の記憶へと飛ぶ。

もし記憶があつたのなら、ブテイカがあの後どこへ消えたのかもわかるのだが、覚えているのは、目。彼がこちらを一瞥したときに見えた、何を考えているのか読めない目だけだった。失踪事件については、ニュースや新聞で小さく「メモリートが解決」と報道されただけである。詳しい情報は何もなく、母をはじめ、大人たちは口をつぐむばかりだった。

須賀の家は二、三日立ち入り禁止になり、いつの間にか空き

家に。志原はついに、一度も姿を見せることはなかった。

ちょうど三週間後、智大はブレイカと再会を果たす。最初で最後の再会だった。これ以降、智大は二度と、この不思議な青年を見ることはない。

誰にも真実を言うことができなかった智大は、あの公園にその姿を見つけるなり、ものすごい形相でブレイカに駆け寄った。そして、一人のメモリートを問い詰めた。

「お前、どこ行ってたんだよう」

「メモリートの拠点。任務結果を報告してきた。トモヒロが色々聞きたいだろうと思つて戻つて来た」

流石と言ふべきか。智大は胸ぐらを掴まんばかりに顔を近づけた。

「ああ、色々あるさ！ お前つてそもそも……」

「ストップ。君の聞きたいことは大体わかつてる」

喧嘩腰なわけではなかったが、微塵も怯まずに言われると、逆にこちらが言葉に詰まる。智大はブレイカを睨みつけながらも、口を閉じた。

相変わらず、その目は彼が何を考えているのか、ヒントすら教えてくれない。

「三つのことについて話す。一つ目、メモリートのこと。二つ目、君たちに接触した理由。三つ目、スガネネについて」

……メモリートは、簡単に言うくと特殊な事件を捜査する戦闘部隊。血縁で受け継ぐ能力の他に、記録石と呼ばれる石を用いて各地の「記録」を見る能力を持つ。

俺はこの公園と細道の入り口で、スガが被害者と話している「記録」を見た。俺が寝ていたときだ。本当は細道の途中で「犯行の記録」も見なかったが、「記録」を見る最中は俺が無防備になり、その隙に君か俺が襲われる可能性があった。だから人目のあるところではできなかった。

そしてスガの犯行であると確信。スガ拘束を狙い、細道の途中で彼女を攻撃した。

あのときも話したことだが、君はスガの標的だった。安産祈願でもしたいと言ったんだろう。スガは君を細道で殺し、食うつもりだった。

彼女の腹にはもう胎児などいない。

詰まっているのは被害者たちだ。

本物の胎児は餓鬼と化し、スガの内部から少しずつ母の肉体を食った。それで人間の味を覚え、人間を誘い出しては食うようになった。

そこで一度、智大は口をはさんだ。

「待てよ。何で、須賀さんの赤ちゃんがそんな怪物になったん

だよ」

「推測だが、スガは胎児ができたことで志原に捨てられた。そのストレスで暴飲暴食を繰り返したのではないか。餓鬼は名の通り餓えている。羨ましかったことだろう」

志原は海外出張をしているのではなかった。彼女を捨てていたのだ。その腹の子供ごと。

須賀が太り始めた原因は暴飲暴食。痩せ始めた原因は餓鬼に食われていたから。

ブテイカは微かに眉をひそめた。

「スガは胎児を憎んだ。憎み続けた。そうした負の感情を食い、力をつけた餓鬼は、スガの体へ入り込んだ……」

……鬼というが、悪霊のようなものだ。業を負い、地獄で永遠の炎と飢餓に苦しむ者。餓鬼が事件を起こしたケースは、過去に記録がある。

魍魎魍魎はメモリートが駆除する対象の一つ。最善手は彼女と一対一で細道へ行くことだったが、君はついて来てしまった。いつもは風を司る能力者であるソラくに、味方を一瞬浮き上がらせてもらう。その隙に土を司る能力者である俺が、地殻変動を起こしていた。

突然持ち上げてしまったことに関しては、詫びる。俺の能力は炎や水を司る能力者に比べれば、低威力かつ無器用なもの。

メモリートについては色々あると思うが、言及しないでほしい。そもそも君に見せるつもりはなかった。これ以上説明するつもりはない。

スガのことについては……

「彼女にまだ少しでも『人間』が残っていたのなら、殺す必要はなかった。中身が食われていようと、抗う心があれば、いくらでも治療できる。しかし、彼女は愛する者の名を答えることができなかった。それに、大切な存在であるはずの君を、次の標的に選んだ」

彼は自分の感情を吐露しない。聡い彼は、その行為が何の意味も持たないことを知っている。

それでもイブティカルは、化け物ではなかった。

紛れもない人間だった。

肉体が新たな命への肥料となることで、死者が報われるのを祈るしかない、ただの人間だった。

智大はこのときの彼の目を、忘れることができない。

『できることなら、彼女たちを救いたかった』

眩しいくらいに澄んだ翠玉の眸は、確かにそう言っていた。